

ケーススタディ・情報ネットワークと大学

## インターネットがもたらした

### 教育と業務の変化

樋口 義治

ひぐち・よしはる

愛知大学情報処理センター

はじめに

産業社会の次に情報社会が出現する、ないしは現にその過程上にあるとして、現在大学教育においても情報教育の必要性、特にインターネットの導入が喧伝されている。筆者の勤務する愛知大学においても、一九九四年に全学ネットワークが敷設され、そしてインターネットにつないだ。そのことは、それまでの単体のパソコン利用からネットワークを基本とする、仮想的には全世界のコンピュータと連結されたパソコン利用へと変わっていくことを意味した。こうした主としてインターネットの導入により、教育と業務に生じた様々な変化について簡単に述べることにする。

### 教育の変化

(1) 情報関連科目への需要の増大

これは必ずしもインターネットの直接的

な影響とばかり言えず、むしろ情報社会への学生の対応といえるかもしれないが、情報関連科目への受講生の増加がある。またカリキュラム上も、学生のニーズに合わせた情報関係科目が、必要に迫られ各種バラエティのあるものとなってきた。例えば、本学では情報基礎科目といえ、九五年まで「情報処理論」のみであった。しかし、九六年からは「情報処理演習」「情報の科学」「情報と社会」「情報処理論1、2」となり、開講コマ数も「情報処理演習」などは半期終講であるが、十コマを超えるようになり、これでも学生の需要に間に合わず、やむなく抽選をしている。(2) その特徴

では、こうした科目を受講する学生の特徴であるが、もちろん一部には既にパソコンの利用に精通しているものもいるが、初心者がほとんどである。高校の「情報基礎」科目は、進学校であればあるほどまともなやつてきていない。むしろその時間は別の受験科目に当てているようである。そのため、大学の情報の授業内容は、まさに一番はじめからである。まず学生はキーボードと格闘することとなる。このキーボードがなかなか大変で、キーの位置を覚えることも向き不向きがあり、タイプライター文化ではない日本人には、本来無理があるのではないかと思えるほど、一部

の学生は練習してもその効果が薄い。

(3) リテラシー教育に留まる

このように最も基礎的なところから授業をするので、その内容も極めて限定的になっている。一年次生の科目は、キイボードのタイピング練習と日本語入力、そしてメールの利用であり、WWWも少し触らせるが、半期ではその程度である。また、最近ではその次に情報発信が大事ということとホームページの作成をさせるが、単なる初物の好奇心のみに留まり、発信する内容の貧弱さが目立ってしまう。

小学生などが、これはやらせのとも見えるが、いきいきとインターネットを通じて世界中と交流しているのと比べて、大学生の教養の無さ、主張したい内容の希薄さが目立ち、情報の交流以前の問題がある。ただ、ここ一、二年就職にインターネットを利用する企業が増え、三、四年生になつて慌ててメールなどの講習を受ける学生が殺到する。さすがにこの場合は真剣であり、実質的利用を行っている。(4) 教員の利用の少なさとその能力の低さ

学生は情報社会への不安と期待から、その内容はともかく積極姿勢が見られる。しかし、教員の場合は尻込みをする。さすがに、以前のように声高にコンピュータ批判をするものはいなくなったが、しかし本学のような文化系大学

では、教員の利用はほとんどワープロに限られている。もっとも電子メールを利用するものは増えてきている。しかしそれ以上に情報を積極的に利用している教員は少ない。その結果、学生側ではレポートをワープロで作成し、メールで送る準備はできているのであるが、肝心の教員にはこれを受け取ったり、送り返したりする能力がない。そのため学生の情報利用も停滞してしまふ。

### 業務の変化

(1) ネットワーク管理の増大とそれに伴う問題の山積

情報社会の本質は、世界中のコンピュータを繋ぐというネットワークであろう。当然学内の主としてパソコンはネットワーク化されている。情報に係る業務の主たる変化は、ネットワーク化によるものである。このパソコンを切り離して使っていた時は、トラブルは個々に留まっていたのであるが、ネットワーク化により一台の故障は他へ影響を与える。特に、ネットワークをコントロールしているサーバーの故障はそれにぶら下がるパソコンの機能を不能にする。中でもインターネットに依存する電子メールとWWWの利用は、関連サーバーにその死命を制せられている。当然ネットワーク維持が、情報業務の中心となる。しかし様々な理由でこのサーバーがダウンしその度ごとに利用者

からお叱りを受けるのである。

(2) セキュリティ

電子メールやWWWを二十四時間正常に動かす事が使命ではあるが、近年ではセキュリティの問題が現実化してきている。ネットワークを導入した九四年頃には、できるだけ自由にオープンにという理想に燃えていたのであるが、本学でも、コンピュータウイルスに感染し、ハッカーに入られ、メールが流失したり、その他内部、外部からの無数の攻撃に晒されている。また、ホームページに中傷内容の文書を載せたり、それをどうするかなど「倫理問題」を抱えている。

おわりに　このように急激なネットワーク化と情報社会

の進展は、大学の教育と業務に大きな衝撃と変化を与えている。しかしながら、本質的には保守的な大学は、構成員の大多数は惰眠をむさぼっている。むしろ来るべき社会への不安からか、アンシャンレジューム的な体制にも回帰している。しかしながら社会の情報化への変化は誰も止められず、大学においても混乱しながら脱皮していくのであろう。